たこつり長兵衛　　青森県

むかし、あるところに、長兵衛という男が、息子とふたりきりで住んでいました。たいそう貧乏で、川が海にそそぐあたりに小さな小屋を建てて、毎日たこをつって暮らしていました。

やがて、息子が大人になると、長兵衛は、息子に家をまかせて、あちこち旅をしてみようと思いました。そして、わずかなお金を持って家を出ました。

ある城下町まで来たとき、長兵衛は、一軒の家に泊めてもらいました。二、三日泊まっていると、その家の末娘が、長兵衛に、

「あなたには、息子がありますか」とききました。長兵衛が、今年二十歳になる息子があると答えると、娘は、

「それなら、一生のお願いだから、わたしを息子さんの嫁にしてください」といいました。

長兵衛は、びっくりして、

「どうしてどうして。おらのうちは貧乏で、あなたのようなりっぱなうちの娘を嫁になんてできません」といって、ことわりました。それでも、娘は、

「なんでもいいから、嫁にしてください」といいます。長兵衛は、

「そんなにいうなら、しばらくしたら迎えに来ましょう。わしは、たこつり長兵衛といいます」といって、家に帰っていきました。

娘は、親からりっぱな嫁入り支度をしてもらって、長兵衛からの迎えを待っていました。けれども、いくら待っても来ないので、自分のほうからたずねていきました。

村に着くと、村の人たちにたこつり長兵衛の家はどこかとたずねました。けれども、だれひとり知りませんでした。娘は探し回ったあげく、子どもたちが集まって遊んでいるところにやってきました。

「あんたたち、たこつり長兵衛を知らないかい」と、娘が聞くと、子どもたちは、

「ああ、たこつり長兵衛か。あの人は、海辺の掘立小屋にいるよ」と教えてくれました。

娘が教えられた所に行ってみると、そこに長兵衛と息子がいました。長兵衛は、

「こんなうちだから、あなたのような人が住めるかどうかわからないので、迎えに行かなかった」といいました。

娘は、親からもらって来たお金で、村のだれも住む人がいない古い空き家を借りました。それから、村の主だった旦那衆を呼んで、結婚式の大振舞いをしました。たこつり長兵衛が一足飛びに旦那衆のように金持ちなったので、村の人たちはみなたいそう驚きました。

ある晩のこと、長兵衛は、ひとりで留守番をしていました。すると、台所の西の隅から大入道が出てきて、いろりの火にあたりました。長兵衛は、恐ろしくて生きた心地もしませんでした。

しばらくすると、大入道は、

「どら、また来るべい」といって、もどっていきました。息子と嫁が帰ってきたので、長兵衛は、さっきの出来事を話し、

「わしは、もう、ひとりで留守番はできない」といいました。

つぎの晩、息子がひとりで留守番をしていました。

すると、台所の西の隅から大入道が出てきて、息子のそばで火にあたりました。息子は、恐ろしくて生きた心地もしませんでした。

しばらくすると、大入道は、

「どら、また来るべい」といって、もどっていきました。息子も、

「おれは、もう、ひとりで留守番はできない」といいました。

つぎの晩は、嫁がひとりで留守番をすることになりました。夜が更けると、台所の西の隅から、大入道が、のっそらのっそらと、三人も出てきました。そして、嫁が化粧をしているのを黙って見ながら火にあたっていました。

嫁は、化粧がすむと、お茶とまんじゅうを出してきて、

「さあ、おあがり」といって、大入道たちにすすめました。大入道たちは、うまそうに食べてしまってから、

「どら、また来るべい」といって、もどっていきました。

そのつぎの晩も、嫁が留守番をしました。夜が更けると、大入道が三人、のっそらのっそらと出てきました。嫁が、お茶とお菓子を出すと、大入道たちは、うまそうに食べてから、いいました。

「いや、おまえの度胸のよいのにはおどろいたぞ。わしらは、なんにも恐ろしい化け物じゃあない。ここの台所の西の隅に埋めてある三つのかめに入っている古い金だ。ちゃんとした

人の手に渡りたくて、いつもこうやって出てくるのだが、来る者も、来る者も、恐がって逃げていく。それで、いつまでも浮(う)かばれないで、こうやって出てくるのだ。どうか、おまえの宝になりたいから、わしらを掘(ほ)り出しておくれ」

そういい終わると、大入道たちは、もどっていきました。

嫁は、長兵衛と息子に、このことを話して聞かせました。

あくる日、台所の西の隅を掘ってみたら、かめが三つ出てきました。中に、山吹色(やまぶきいろ)の金がどっさり入っていました。三人は、大喜びしました。

こうして、たこつり長兵衛は、息子の嫁のおかげで、安楽に暮らしたということです。

どっとはらい

村上郁再話

資料『手っきり姉さま』能田多代子／未来社